

【研究ノート】

## 日本学を巡る論点の試行的整理

— 国際日本文化研究センター設立時の議論を手がかりに —

筒井 琢磨

### 1. はじめに

本稿は、国際日本文化研究センター設立時のシンポジウム内容から日本学を巡る論点を整理することを目的とする。

今から20数年前の議論であるが、現代日本学という新たな学問領域構築を模索する本学部にとって、設立間もないという研究機関としての状況が似ていることと、基本的な課題については当時とそれほど大きく異なるものではないことの2点で十分検討する意義があるものと考ええる。

1988年に設立された国際日本文化研究センターが最初に開催した、国際シンポジウム（1988年3月9～12日）では10テーマが設定され、それぞれシンポジウム形式での議論がおこなわれた。10テーマのうち、本学部が抱える課題にも通じる基本的な課題を扱ったと思われる2テーマの議論を取り上げて、論点を整理する作業を進めたい。2つのテーマとは、「日本研究のパラダイム」<sup>1</sup>と「自国研究としての日本研究・外国研究としての日本研究」<sup>2</sup>である。

### 2. 日本学と日本研究

1つ目の「日本研究のパラダイム」シンポジウムでは、上山春平議長の下、J. V. ネウストプニーが最初に発表し、伊東俊太郎がコメントし、参加者による議論が繰り広げられた。

ネウストプニーによれば、日本を対象にした研究は発展段階的にタイプ化でき、(1) ジャパノロジー型パラダイム、(2) 日本研究型パラダイム、(3) 現

代型パラダイム、の3つのパラダイムに整理できるという。なお、「パラダイム」の語は「パラダイムシフト」など、通常思い浮かべられる意味とは異なる意味でネウストプニーは用いている。ネウストプニーの整理に基づいて順に内容を確認していくことにする。

### (1) ジャパノロジー型パラダイム

近代社会が確立された頃（19世紀後半から20世紀初期にかけてもヨーロッパを念頭に置いているが、現在の発展途上国も当てはまるとする）の国々が、確立されたばかりの自らの近代社会と、世界との関係を位置づけようとする試みの結果として出現した研究タイプとされる。心理的にも地理的にも離れた国である日本のことを研究することによって、見知らぬ「世界」を知って教養を深めることを重視するタイプである。具体的な実用価値はあまりなく、同時代の日本よりも、日本の過去が研究対象となる。代表的な研究分野は、日本の政治史、文化史、文学史、史的言語学である。理論的な枠は東洋学であり、文献学の流れに属する。

### (2) 日本研究型パラダイム

第2のパラダイムは第1のパラダイムへの反抗として、第2次世界大戦頃から形成されたタイプである。ジャパノロジーが明確な理論や方法論を持たない点、史的研究が強調される点を批判的に受け止め、当時出現し始めていた構造主義的なアプローチを取り入れたパラダイムである。第1のパラダイムが「教養的」であるのに対し、このパラダイムには「応用性への傾向」が見られるという。また、このパラダイムの特徴を捉えるのに不可欠な研究テーマは「近代化」の問題である。すでに近代化を完成させていた自らの社会から見下ろす形で、日本社会の近代化を冷淡に見つめる態度が背景にあるという。人文科学に偏っていた第1のパラダイムに比べると社会科学への関心が広がったパラダイムである。いわゆる、Japanese studies にあたる。

### (3) 現代型パラダイム

第3のパラダイムは、構造主義時代の後に訪れた、現在の研究パラダイムであり、第2のパラダイムが単一社会としての日本が研究対象となっていたのに対し、社会階級、少数民族、地方社会、男女差などの内部のバリエーションに強い関心を持たれるようになってきている。ただし、政治的には中立的な研究態度である。現在発展しているパラダイムのため、全貌を描くことはできないが、他にもいくつかの特徴がある。社会問題への関心もその1つである。前の2つのパラダイムと比べて、テーマ範囲が広がっており、以前は「学問」とみなされなかったテーマも扱われるようになってきている。たとえば、ビジネスコミュニケーションや通訳の技術、観光業に関するテーマなど。

ネウストプニーは講演の中でさらに、この3つのパラダイムを区別することによって、パラダイムの背後にある、日本研究が果たしている社会的機能を明確化することができることについて考察をしていて、パラダイムそのものよりも機能の方を重要視している。しかし、その後のシンポジウムの議論の流れでは、3パラダイムによる整理の方が共通理解事項として用いられているため、機能については本稿では触れないことにする。

伊東俊太郎がネウストプニーの講演を受けて、パラダイムに絞ってコメントしている。ネウストプニーの描く日本研究の3パラダイムは時代発生順に特徴付けられてきたものであるが、古いパラダイムから新しいパラダイムへすべての研究者が移行したわけではないと伊東は指摘する。伊東は3パラダイムがそれぞれユニークな長所を持ちながら現在併存しており、また、併存すべきであると述べている。そして、世界の中での日本をどう見るか、日本研究の研究者の意識の変化が過去に3段階の発展があって、ちょうど3パラダイムと対応するのではないかと指摘している。端的な表現を抽出すると、第1段階は異国日本の研究、これがジャパノロジー型パラダイムと対応する。第2段階は近代化日本の研究、日本研究型パラダイムと対応する。第3段階は普遍日本の研究、現代型パラダイムと対応する。第2段階がヨーロッパセントリックな尺度で日本を見ている限界があって、それを克服する必要が生じた。その結果、地球の

すべての文化・文明はそれぞれ自身の独特な特色を持っていて、同時にそれが他の文化・文明の発展に寄与する、という認識の上に立って、普遍的価値を持っている文明の1つとしての日本が研究対象としてみなされるようになってきたとする。第3段階はナショナリズムや日本の優越性などとはまったく無縁であると伊東は付け加えている。

パラダイムという言葉を使うべきなのか、誤解を生じさせないようにあえて避けるべきなのかは見解が分かれるところであるが、整理棚としてはこの3区分は使いやすいものに思える。ネウストブニーと伊東の議論を踏まえて、日本に関する研究のタイプを整理しなおしたものが表1である。すべての研究をうまく収納できるわけではないが、研究のおよその特徴をつかもうとする際のある程度の目安にはなろう。

表1 日本研究のタイプ

研究のタイプ	扱う主要な時代	扱う主要なテーマ	理論的な枠組み
ジャパノロジー型	近世以前	人文学的題材	史的研究
日本研究型	近代	社会科学的題材	近代化論
現代型	現代	社会問題	比較文化論

### 3. 自国研究と外国研究

2つ目の「自国研究としての日本研究・外国研究としての日本研究」シンポジウムには、副題として「二つの日本研究の協調的競争の可能性」が掲げられている。杉本秀太郎議長の下、園田英弘が最初に発表し、S.リンハルトと山崎正和がコメントし、参加者による討論と続いた。

園田は発表の冒頭で、発表の目的を「日本人による日本研究と日本人以外による日本研究の違いを明確にし、あわせて異なる二つのタイプの日本研究が相互に刺激し合うことによって、新しい研究のパラダイムが形成される可能性を模索しようとするものである」としている。

園田によれば、日本に限らず自国研究は「自国」意識のあり方で性質が異

なってくる。自分の国の歴史や文学や政治を研究することは、とくに「自国」を研究対象にしているという自覚なしに行われる傾向があり、特定の時代や文学を対象を限定することになる。その結果、自分の研究を自国研究という大きな枠組みの中に位置づけることはほとんどない。逆に、強烈的な「自国」意識に裏打ちされた自国研究は強いナショナリズムを背景として、日本だけでなく「自国の優秀性や極端なまでの独自性を強調する研究を生み出したり、過度に自国の文化の普遍的な価値を主張する思想や社会科学の理論を作り出したりした」とされる。

とくに後者の研究姿勢への反省から、戦後の日本で一般的になったのは、「普遍的な立場から（言い替えればコスモポリタンの観点から）日本を研究する態度」であった。別の表現では、「専門という普遍的な学問体系に立脚して、日本を単なる一研究の事例として研究する」態度であり、「正しさがすでに認められた理論を、日本という具体的事例に適用するという形の研究をもたらす」ことになる。こうして、「自国研究としての日本研究は、その実質においては自国意識を抑圧することによって初めて成立」したと園田は指摘する。

自国研究者にとって研究対象に密着して生活していると自国全体に関する知的関心を持ちにくく、逆に、対象に対する違和感・異質感を知的関心の根底に持つ異邦人・外国人だからこそ持てる感覚はその国に対する幅広い関心を持つことができ、外国人としての特権ともいえると園田は言う。

自国研究は自国をまとまった全体として研究対象にしようとする方向性がなく、自国においては地域研究的な発想が成り立ちにくいと園田は指摘する。この点を園田は、ヨーロッパには「ヨーロッパ日本学会はあっても、日本には日本日本学会はない」と表現している。

その結果、「日本人の日本研究は、日本ということに研究の対象を絞り込んだものの集大成というよりは、世界の多くの自国研究の場合と同様に、各専門分野別にばらばらになされてきた研究の集合である」。また、「自国研究という自覚的な努力の結果というよりは、意図しない結果としての日本研究ということになる」。外国研究は対象地域の全体を見渡す地域研究であるところに特色があるとすれば、自国研究の特色は専門志向的な点であると園田は結論づける。

専門志向的な研究では、重要なのは専門領域であって、研究対象が「自国」か「外国」かは本質的な違いを持たないのである。

こういった傾向について、園田は2点指摘する。1点目は、専門的研究の結果生まれてきた理論や解釈の普遍的妥当性を過度に強調するのは危険であるということである。2点目は、日本人によってなされている「結果としての自国」研究を、もう少し意図的な、自覚的な日本研究＝地域研究にする必要があるのではないかということである。

園田が発表の結論としている部分を抜粋する。

専門諸学の普遍性の神話によりかかり、日本の社会や文化を他の社会を分析するための用具として開発された既存の理論で解釈するのではなく、日本を分析するための概念を日本を研究する中から作りだし、そのことによって世界の人文科学・社会科学に貢献すべきではないかということである。

(略)

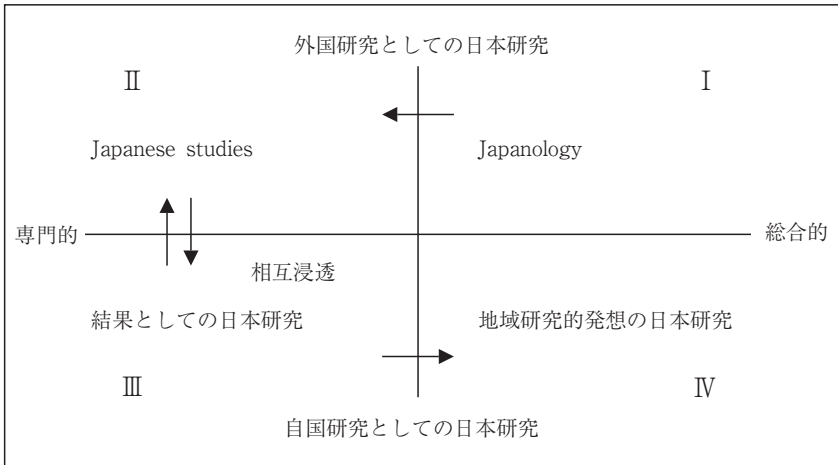
「自国」を深く分析することこそが、そしてその結果をできるだけ専門的な学問体系の言語によってそれぞれの専門の中に位置付けることによってこそ、真に普遍的な人文科学・社会科学の学問体系の創造に貢献し得るのだと主張したいわけなのである。そして「自国」というものを強く意識し、しかもかつての独善的自国研究が陥った致命的欠陥を避けるためには、比較という視点を導入することが不可欠である。

(略)

外から見た日本と内から見た日本のズレを一つの突破口として、より深い日本の理解とそれを土台としたより普遍的な理論の形成に貢献できるのではなかろうか。<sup>3</sup>

筆者も日頃から、「コミュニティ」や「ゲマインシャフト」が実は個別文化特有の土着概念が発祥である印象を受けているため、日本の地域社会発祥の独自概念も何らかの社会現象を分析する際の普遍的なツールとして国際的に通用するのではないかと密かに期待している。

園田が最終的に導く概念図を図1に示す。



出典：国際日本文化研究センター編『世界の中の日本Ⅰ—国際シンポジウム第1集—』1989年、261頁より

図1 日本研究の展望

園田の結論は第Ⅳ象限「地域研究的発想の日本研究」の提案にある。一人一人の研究者が総合的な研究を進める必要はなく、各自の専門領域における研究成果を総合化する視点が、自国研究でも求められている、ということである。

園田の発表に続いて、リンハルトが3点コメントをつけている。1点目は、「日本人の日本研究は自国研究である」という表現について、実情はそれほど単純ではないことを指摘している。2点目は、自国研究と外国研究が二分法的にすっぱりと分けることができないことを指摘している。たとえば、江戸期の蘭学者の研究は外国研究と位置づけられるが、最終的には自国研究を目指したものと解釈できる。3点目は図1が示す方向性（Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳと読める）は必要ないのではないかという指摘である。

リンハルトのコメントは3つとももっともなことであり、3点目については園田も、4象限の研究が並列していることを認めている。1点目と2点目のコメントは、2人目のコメンテーターである山崎のコメントによって暴かれた、論点が実は自国研究／外国研究の区分にあるのではなく、ディシプリンの研究／地域研究の区分にあるという指摘につながるものである。

山崎のコメントの骨子は、「地域研究とディシプリナリーな研究は循環する関係にある」というものである。研究者は自分の専門領域 discipline への所属意識を明確に持っていて、専門領域独自の理論や概念を使って地域研究 area studies に取り組むのが常である。そうした研究活動の成果として、専門領域の理論や方法論、アプローチを見直さなければならない知的発見が地域研究から生まれることがある。かくして、地域研究とディシプリナリーな研究は循環するのである。

#### 4. おわりに

日本学をはじめ、地域名称を掲げる東洋学、西洋学、アメリカ学、フランス学などはたしてディシプリンになり得るのか。現時点では、多次元なディシプリンによる総合的な研究の営みとしての地域研究として捉えるべきではないかと考える。日本学については、図1の第Ⅳ象限「地域研究的発想の日本研究」が当面目指されるべき研究スタイルであり、他地域研究との比較に基づいてその独自性を抽出する研究作業の蓄積が必要であろう。総合化を図るためにはおそらく、幅広い視野を持った学術的コーディネーターの存在が不可欠である。また、少なくとも、学際的な取り組みに長期にわたって携わる覚悟を一人一人の研究者は持つべきであろう。

#### 【注】

- 1 国際日本文化研究センター編『世界の中の日本Ⅰ—国際シンポジウム第1集』国際日本文化研究センター、1989年、79 - 105頁。
- 2 『同上』、253 - 272頁。
- 3 『同上』、262 - 263頁。